

「イエスの名のカ」(使徒言行録3章1-10節)

1 キリストを主として

7月末からキリスト教学校の日と定めて学生さん生徒さん方と一緒に礼拝を捧げることをしてきましたが、今日が一応最後になります。特別なプログラムは今日で終わりになります。しかしどうぞこれからもつづけて教会においでください。いつでも歓迎いたします。少し先ですが、クリスマスにも教会にきて一緒に祝いできればさいわいです。

キリスト教会にしても、キリスト教学校にしても、キリスト教を冠しているわけですから、キリストからはじまった、大きくいえばそういつて間違いありません。いまから二千年前、現在のイスラエルという国に、一人のユダヤ人、イエス・キリストがお生まれになった、そこからはじまった。

イエス・キリストについて簡単に紹介すればこうです。この方は33年の生涯をおくって、最後にユダヤ(イスラエルは当時ユダヤという国だった)を支配していたローマ帝国の一人の役人のもとで、ポンティオ・ピラトという名前の人です、彼のもとで十字架につけられて殺された、しかしイエス・キリストは葬られて三日たって神様の力によってよみがえらされた。よみがえる、復活というのは、息を吹き返したとか、死んでいなかったとか、間違ってお墓に入れられたというのではなくて、死の世界から生の世界へ戻ってきた(こういう人はだれもいません)、死はイエス・キリストを自分のところにいつまでもとどめておくことはできなかった、難しくいえばイエスは死に勝利した、そういう人であった。そしてそれをイエスは彼と行動をともしていた人たち、つまり弟子たちに知らせ、その上で、もう一度世に來られることを約束して、天に、天というのは、空ではなくて、神のおられるところ、そういうふうに聖書は考えているのですが、その天に、つまり神のもとに帰って行かれた、したがって今は、天におられる方として、同時にまた神の特別な力によって、少し難しい言い方をすれば聖霊によって、いまもここで私たちと共におられる、そういう神でありまた人である方です。

イエス・キリストといま私はいいましたが、これも皆さんご存じのように、学校でも最初に習うように、イエスは名前です。当時は名字はなかった。ですからイエスの場合は父の名をつけて、ヨセフの子、また出身地をつけて、ナザレのイエス、ナザレ人イエスと呼ばれていました。お父さんのヨセフはダビデ家の出でダビデの子ヨセフという呼び方もされていた。そこでその子イエスもダビデの子イエスと呼ばれることがあったのです。

イエスは名前ですが、キリストは名前ではありません。あえていえば地位、ないし務めを指す言葉です。旧約聖書のメシアという言葉がギリシャ語に直したものです(当時地中海を囲む地域、とくにその東部はギリシャ語の地域)。イスラエルでは王に即位したり、大祭司になったりしたとき、即位式・任職式などで香りのよいオリブ油

をかける、頭からかけることがおこなわれていた。メシアとは油注がれた者という意味です。香りが広がるように、神のよい働きがこれら王や大祭司を通して広がっていくようにということでしょうか。そこからメシアという言葉はイスラエルを救うダビデのような王の到来を願って使う言葉となったのです。救い主という意味です。「イエス・キリスト」というのは、あのイエス、すなわちパレスチナの一角で33年の生涯をおくり、はっきりした使命感をもって神の国の宣教に従事し、最後に十字架につけられた、しかし復活し、天に昇ったあのイエスこそ救い主であるという信仰の告白をふくむ呼称となったのです。このイエス・キリストにはじまるキリスト教、その方を主とする、まことの主とする群れが教会です。またその名によって建てられた学校がキリスト教学校です。

2 イエス・キリストの名

今日の聖書は使徒言行録です。イエス・キリストが天に上げられて、地上にはいなくなりました。そのあとを引き継いだのが弟子たちです。使徒とも呼ばれました。その彼らの活動を記録したのが使徒言行録です。紀元30年から60年ぐらいまでの記録です。

キリストが地上にいて、弟子たちがキリストと共に神の国の宣教に従事していた時と、いまキリストがおられなくなつてからの時と、当然のことながら大きな変化がそこにはありました。

それをもう少し説明しますと、生前イエス・キリストは周りからはラビと呼ばれていました。ラビというのはユダヤ教で先生という意味です。弟子たちもラビと呼んでいます。

考えてみてください。先生と生徒、全然違うかという点も必ずしもそうではありません。同じ一つの方向を向いて一緒に真理を追究しているという点で、じつは同じなんです。弟子たちもイエスと一緒にいたところはだいたいそう考えていた。ところがその先生であるイエスが、あろうことか十字架という、当時犯罪者が受ける方法で殺されてしまった、しかももつと驚くべきことに死人の中から甦った、その衝撃的な経験をすることで、イエスに対する認識が変わっていった。弟子たちは旧約聖書を改めて読んでみた、イエスが生きているとき語ってくれた言葉をもう一度思い出しじっくり考えてみた。すると、イエスというのは、われわれに真理を教えてくれる、われわれと一緒に真理を追究している先生ではなくて、真理そのものであることが分かった。十字架にかかったのも、よみがえったのも神様の特別の計画であった。それは私たちに代わって死んで私たちの罪のあがないをなすとげ、私たちに死のその先の生を、永遠の生を、神と共なる生を、復活によって開いてくださった方、真理そのもの、救い主であるということが分かったのです。簡単にいうとイエスはキリストであることが分かった、イエスをキリストとして言い表す(告白する)、みんなに伝えるのが、後に残されたわれわれの使命だということが分かったのです。

そこから弟子たちの生き方は少しピリツとしてきたのです。「二人の弟子、イエスを裏切ったイスカリオテのユダに代わって選ばれたマテイア、彼も含めて二人の弟子、使徒たち、彼らはただ生徒であるだけではない、真理のために命を賭して福音を宣べ伝え、その種をまき、教会を形成し宣教する人となったのです。人間は変わる、変わりうる。変わりうるから人間なのです。そうして大きく変わった弟子たち、その活動を記しているのが使徒言行録です。

今日の箇所にあるのは弟子のペトロによってなされた奇跡の話です。福音書にはイエスの奇跡がたくさん出てきます。さつきイエスと弟子は違うといいました。イエスは真理そのものだけでも、弟子や使徒はそれを伝達する人です。しかしその彼らの奇跡も初期にはなされたようです。生まれつき足の不自由な一人の男がいやされて歩けるようになった。ペトロたちと一緒に神を賛美する人になった、この奇跡のもっとも重要なところは、次のように伝えられています。

ペトロはヨハネと一緒に彼をじっと見て、「わたしたちを見なさい」と言った。その男が、何かもらえるところで、一人を見つめていると、ペトロは言った、「わたしには金や銀はないが、持っているものをあげよう。ナザレの人イエス・キリストの名によって立ち上がり、歩きなさい」(46節)。

何より注意したいのは、「ナザレの人イエス・キリストの名によって」といつているところです。

「名」(名前)ということでは私たちは名とその名によって表される実在は違う、別だと考えます。一般にはそうです。名は便宜的なもの、便宜的につけられるものと考えます。しかし聖書で名というのは、その人格、実在を表し、人の能力はその名に宿る、名によって名の持ち主の力が発揮されると信じられていました。とくに神の名は神そのものと考えられていたのです。神の名をみだりにとなえることが禁じられていたのは、そういう考えによります。

使徒言行録は、申し上げたように、イエス・キリストがこの地上を離れてからの弟子たち、教会の様子を書いたものです。ペトロによる足の不自由な男のいやし、それはたしかに奇跡です。しかしもっと重要なことは、それをもたらしたイエス・キリストご自身が、キリストの名において教会の群れの中にあつた、それが生きて働いていた、そのことではないでしょうか。こうしてキリストが主としていますところ、そこが教会です。キリスト教学校も基本的に同じです。

3 カの問題

イエス・キリストの名の持つ力、それが教会の中心にあることを知ることは挑戦的なことです。キリスト教というものについてのイメージを私たちが考え直すきっかけとなるように思います。

聖書によって私たちはイエス・キリストのことを知り、その愛を知り、恵みを知るわけですが、またイエスの高邁な生き方に学び、その教えの高さにときに深く打たれるわけですが、そしてそれはたしかに聖書の示す、キリスト教が私たちに示す大事な側面であることは間違いないことです。その意味で聖書が座右の書という人も一般に少なくありません。

しかし、さきほどのペトロの「ナザレの人イエス・キリストの名によって立ち上がり、歩きなさい」という命令につづいて、じつさいこの男が立ち上がって歩き出したことを考えると、どうでしょうか。

右手を取って彼を立ち上がらせた。すると、たちまち、その男は足やくるぶしがしっかりと、躍り上がって立ち、歩き出した(78節)。

いま私は「神の国は言葉ではなく、力である」(1コリント4:20)というパウロの言葉を思い起こします。キリスト教では素晴らしい教えが説かれている、キリスト教の中心は愛、あるいは希望である、それはその通り間違いではありません。しかしキリスト教の中心はそうした言葉や概念ではない。イエス・キリストの名であり、その名の持つ力なのです。神の言葉が力をもってなるということ、それによって私たちが本当に助けられ、本当に生き、日々を歩むということ、それがキリスト教で大切なことです。心の持ち方の問題、心情の問題ではなく、力の問題です。

昔のこと、今から200年近く前、ドイツの西南地方で活躍した牧師にブルームハルト(1805-1880)という人がいました。その子供も著名な牧師として活躍したので、しばしば父ブルームハルト、子ブルームハルト(1842-1919)と区別していますが、いまいつているのは父のほうです。彼がある村(メットリンゲン)の牧師であったとき、一人の、突然発作に襲われ、倒れてしまう、一種の憑依ひょうい、ものにとりつかれたような状態になる病気で苦しんでいた少女がいやされるという不思議な経験をします。ブルームハルト牧師のところにはいやしを求めて世界中から人が集まり村は人であふれたそうです。しかし彼は特別なことをしたわけではない。牧会者として御言葉と祈りをもって少女のいやしのために戦ったのです。2年後、ついに、同じような発作に襲われていたこの少女の姉の「イエスは勝利者だ、イエスは勝利者だ」という吠えるような叫びと共にいやされたというのです。詳しいことを今日話すことはできません(井上良雄『神の国の証人ブルームハルト父子』新教出版社、1982)が、そういうこともあったということを出しながら、私が申し上げたいことは、キリスト教というのは、何かお上品な、お上品と違って悪ければ、特別に道徳的な人をつくる宗教というものではないということです。イエス・キリストの名、これを究極のものとして、これに依って立つ、宗教といたなければいってもかまいませんが、宗教ではなくて、信仰なのです。私たちがこの名以外に救いはないとかたく信じ、そこに立って、教会の、また日々の生活の歩みを進めていきたいと思えます。(2018年8月19日)